

『大乘莊嚴經論』におけるブドガラ批判

小野 基

『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrāntakāra, ed. by S. Lévi, Paris, 1907, MSA と略記) 梵文第十八章第九十二―百三偈は、犢子部・正量部が主張したブドガラ(Pudgala)に対する批判を内容としている。本稿ではその中の理証の部分(第九十二―百偈)の議論の概要を紹介するとともに、他の論書におけるブドガラ批判と比較して、その特徴を明らかにしたい。

1. MSAにおけるブドガラ批判

論者はまず、ブドガラは存在すると言うべきか存在しないと
言うべきか、という問いに対して、「(ブトガラは)名称(Dharmajapiti)としては存在すると、実体(Dharmya)としては存在し
ないと
言うべきである」(v. 92ab)と答えて議論の出発点とする。従って、ここで批判の対象となるのは、「ブドガラは実体として存在する」という主張である。ここでは、ブドガラの
実体としての存在性は以下の諸点から理論的に否定される。

① 統覚による認識の不可能性

第一に、ブドガラ論者はブドガラを統覚(buddhi)によって、すなわち、「これがブドガラである」という様に自覚的に、

知ることはできない。一般に実体は統覚によって認識される。従ってブドガラは実体としては存在しない(v. 92cd)。

② 「一異不可説」という定義の不当性

第二に、「ブドガラは五蘊と同一とも別異とも言えない」(「一異不可説」というブドガラ論者の伝統的な主張は、ブドガラが名称上の存在である場合には妥当であるが(v. 93)、実体としての存在である場合には意味がなない(v. 94)。さらに、ブドガラは一異不可説であって実体として存在する」ということを火と薪の比喻によって主張することは妥当でない。なぜならば、火と薪とは構成元素を異にしており、また経験的事実として、火のついていない木片が薪と呼ばれ、また火の粉が飛び場合のように薪なくして火が見られる。また釈尊は火と薪とが一異不可説であるとは説いていない。従って、火と薪とは別異であり、一異不可説の喩例としては不適當である(v. 95)。

③ ブドガラが認識主体たることの不当性

第三に、認識主体としてのブドガラが存在することは妥当でない。それは以下の三点から明らかである。

はじめに、主体とは、ブドガラが認識作用の原因であるという意味かその主宰者であるという意味かであるが、認識作用は感官と対象を原因として生ずるというのが仏教の定説であるから、ブドガラは原因ではない(v. 96)。また認識を意のままにはできないから、ブドガラは主宰者でもない(v. 97ab)。

次に、仮にブドガラが存在するならば、例えば視覚作用における色彩や明るさといったような、作用の特質が言及されるべ

きであるが、ブドガラにはそのようなものはない (v. 97c)。

最後に、仮に認識主体としてのブドガラが存在する場合、その感官に対する関係は三通り考えられる。すなわち、(1)主体ははたらきかけ (pratyak) はするが、感官の作用が生じるのは主体を原因としてではなく、偶然であるに過ぎない場合、(2)主体のはたらきかけが感官の作用が生じる原因である場合、(3)主体は感官の作用に対して何らはたらきかけない場合、である。(1)の場合には、ブドガラは感官をはたらかずという行為の主体ではないのだから認識主体であることは不当である (v. 99)。(2)の場合にはさらに、ブドガラが持続的に存在する場合と滅する場合とが考えられるが、もしも作用の原因としてのブドガラが常住ならば、眼が開いている時に色形を見ると同様に眼が閉じている時にもまた色形を見るということになる。またブドガラが滅する場合には無常であることになり、対論者の説と相違する。そして持続的に存在することもなく滅することもないという第三のあり方は存在しない (v. 100)。(3)の場合、主体が作用に対してはたらきかけない場合には、そのような主体は主体と呼ぶに値しない。以上、認識主体としてのブドガラと感官の関係は如何なる場合を想定しても合理的に説明し得ない。

二、MSAにおけるブドガラ批判の特徴

『俱舍論』破我品 (AKと略記)、『おまび』『撰真実論』『積子部の想定する我の考察』章 (TSと略記) は、ブドガラ批判を展開する文献として特に重要であると思われるが、この二論書とMSAのブドガラ批判を対照すると興味深い事実が判明する。

すなわち、AKにおいては、積子部は「ブドガラは実体として存在するのでもなく、名称として存在するのでもない」と述べて、*upadāya* という概念で五蘊とブドガラの関係を説明する (AK ed. by P. Pradhan, Patna, 1967, p. 461²⁰)。従って、AKにおいて批判されているのは「ブドガラは実体として存在する」という主張ではない。一方、TSにおいて批判されているのは、明らかに「ブドガラは実体 (*vastu = dravya*) として存在する」という主張である (TS v. 338—342)。

このように、AKとTSにおけるブドガラ批判は、そもそも批判の対象となる主張が異なる。そして、MSAのブドガラ批判は一で述べたように「ブドガラは実体として存在する」という主張に対するものであって、同一の著者に帰せられるAKではなく、後代のTSの批判と軌を一にしている。

さらに、TSにおけるブドガラ批判の根幹となっている「一異不可説の実体に対する批判の議論は、『量評釈』量成就章第二百五十二百七偈に対するデーヴェーンドラブッディラの註において展開されるブドガラ批判の議論と基本的に同じ論理を用いているが (cf. *Pramāṇavarttikapañīkā*, Peking ed. Che 99 a2—100 a9)」、このような後代の論書のブドガラ批判の「インターン」は、MSAのブドガラ批判に対するステイラヴェティの複註に照らしながら見られる (cf. *Mahāyānasūtrālamkāraṅvṛttibhāṣya*, Peking ed. Tsi 203 a6—b1, 204 a2—3)。

以上から、MSAにおけるブドガラ批判は後代のいわゆる仏教論理学におけるブドガラ批判と近い関係にあると言えよう。